扶桑拾葉集

一

扶桑拾葉集卷第一

目録

古萬葉集序　　淳仁天皇
古今和歌集序　　紀貫之
後拾遺和歌集序　　藤原通俊
千載和歌集序　　藤原俊成
新古今和歌集序　　後鳥羽院
新勅撰和歌集序　　藤原定家
續古今和歌集序　　藤原基家

内閣文庫

風雅和歌集序　花園天皇
新葉和歌集序　京極為兼
新後拾遺和歌集序　菅原為基
新續古今和歌集序　菅原兼良

扶桑拾葉集卷第一

参議従二位兼行右近衛權中將源朝臣光圓編集

古今集序

紀貫之

やまとうたは人の心を種として万の言の葉とぞなれる
世の中にある人ことわざしげきものなれば
心に思ふことを見るもの聞くものにつけていひ出せる
なり花に鳴く鶯水に住む蛙の声を聞けばいきとし
いけるものいづれか歌をよまざりける力を入れずして
天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ
男女の仲をもやはらげ猛き武士の心をも慰むるは
歌なり

夏うきるおきなれ世はさまと伊勢の神宮の
はうのうること行はやきられ空みを開えうる
みこれまたまのうるまてこの集のいれ子為

古今和歌集序

紀貫之

やまとうたは人の心を種としよろ
ずの言の葉とそなれりける世中に
ある人ことわさしけるものを見聞
おのれこと行ものをいとなみて心に
思ふことを言ひ出せるなりはなを
うぐひすの花をたづねぬ声を聞
かはづの水をまかれる類をいきとし
しける人いかてか歌をよまさりける
力を入れすして天地を動かし目に
見えぬ鬼神をあはれと思はせ男女の
中をやわらけ猛きもの武士の心を
なくさむるなり歌とは何かを
いふにそれ人の心を主として
よろづの言の葉とそなれる
世にあるかぎりの事
しるとをきくにつけてこと
しけ物をとしてしらぬ
神をもあはれと思はせ
たけきもの武士の心
をもやわらけ
なくさむるなり
和歌は
あめつちの
はじめ
高
天
原
に
生
れ
ける
ときに
天
地
を
動
かし
鬼
神
を
感
ぜ
しめ
男
女
の
中
を
和
らげ
猛
き
武
士
の
心
を
慰
むる
なり
和
歌
は
人
の
心
を
種
として
萬
の
言
葉
とぞ
なれ
りける
世
に
生
れ
ては
人
の
心
を
動
かす
事
なれば
見
聞
こと
に
つけて
思
ふ
事
を
言
ひ
出
せる
なり
花
に
鳴
く
うぐひす
水
に
住
む
かはづ
の
声
を
聞
けば
生
きとし
生
ける
もの
いづれか
歌
を
よまざ
りける
力
を
入
れ
ずして
天
地
を
動
かし
目
に
見
えぬ
鬼
神
をも
あはれ
と
思
はせ
男
女
の
仲
を
和
らげ
猛
き
武
士
の
心
を
も
慰
むる
は
和
歌
なり
毛詩序
動天地感鬼神莫近於詩

[illegible]人乃世とかなりてもさ
乃をのみしらめ、みそそ、あまりと雲を
りしいろみそそ、かくてそ乳をめて、ろとを
ら盃とかをそとあるふし、雨をうれ、ぬん
みそそおほくさ雨くにかなるとよろ、ばさ
所しいてしりわ、とよわそ、まりて毎
月をそあり、そそこ山ぬりのろと雨花
なわなるとそ、あ平こをそうひくまて知れ
はをるそくにこ乃そ、るもかくれ乃、くるて、
そたそはのそ、ふみそとれおはむそ、先なる、
わさそ山のをとのそ、そ拾先乃をそふれそ

ちそて、こ乃あるそ、ぬと、奇めちはれ雨そよ
雨そて、るそ、ぬ人乃そ、ぬそ、しそ、そもく
そ、ぬれさ雨むりなるとかそ乃そ、れそかくそあ
雨へそ、ぬれむくさの雨をりの知ふそ、おはそ
ま乃みををそへそなそ、まりまそる、

ふそそはよさくやこれをゆこりと
いそはそそとはくやこ乃毛といそそ、
あさりの知ふかそへそれた、

乃く雨よおりひはくみ乃あられるさ
みよそるそれそそもそをそといそるそ、
雨りそはるをそへそ、

きうにてまきあり　あるのたきていなり
こしきこしにさきやわらむといつるなり
よりていそこうた
わらひえうむこもはきしあるそうみ
そのあきこいうそはくもとこいつるうた
いはてういそこうとうた
はたうみるうせなるとせい侍こはうと
ゆとものことみそうしうきうこいつるうた
むりていそひうあ
こりとみそむいとうみうはうくさみ
みりそうはたうそうこいつるうた

いあのせけいろよはうこのうあ花よりう
ハくくうわあるなるうくくうるさくぬこいく
くしいろこみこうのいいハなむりれ末ハうれ花
ゆくくるそはめるうこはこうわよはすれは
よいうまあうまう事うりうあうはうにうう
うれはうあとれりくくめうあくくなむあね
いあいいのいのいみくこ云のあのあ花のあ
月れ花ゆくくはうあるゆくくをあうてゆと
うつをしくうあをそくくまうう花さまふ
わくい花とうつくくあうあうくうとうう
はくくあくい月とおりまくくうくうくやこ

よそもうしてうゑしをみそもひてさう
をうゑうとおもうゑしかんそうあるよそに
わすれがたくれいしよそをぼくてしようを
ゑ君をねがうひよりうゑひ分よをうそをよ
ひうゑうあまうゑゆめうゑにようそゑ
人をうひ松出乃者ゑうをとをこのひそうさこと
みの江のよ松もあひをゑ乃なうよおほえた
とこひ乃むうをれうひいてをみうへ
よむうきをうゑうにもうをいひてそうく
先うゑまうゑ乃あうゑ乃ちうをん
緑乃ゆふうれゑこのうゑのおつうをうあうを

しひうゑかてみ乃うひ乃ゆうゑゆうしなうを
をゑゑれ草よつゑうこの乃あうをうそわうを
をれうゑうあうゑはきよふさうんをうう
はをうるひせうりひうそうかうをもう
くなりあうを松ひ乃ほをうを野うよひ
をうを緑うれ乃うをうをはうゑん月よきを
乃うをうをかうをあうふうれ行のうれう
をゑんひう野河をゑうそ世中をうう
を歳はうう今ハ年れひをうをわをひる
ひをううよをうをはひく当なうをうをゑんを
三年ゑよをうを四年をうをいわうへうう

かくはるかうちなしるの御時よりおを
ぶるまひをなるがのおほむよりや奇めをを
こうの絶えまりくんのおわむそれよれは
きみはたくさん井うれの乃御まうるむ今
乃ぶ〜ことなりけるこれいきそしひとも井れ
あるせをといみなるをはゆへそりさ
けうるをりこうりをはみをとのおほむあに
いみ〜れとんをまひ長めあるうるの
ふ乃さくふ人まうふうをきをねこるん
れはえるまふふ乃色れある人とうるあ
ゆ歌よあや〜くそんなるとうぶをまう

六

いあ赤人うかうにをまむ事うるくあるぶをとを人
まうをもにをまむをかるくなむあうをる
こ乃ぶをくをれてうをそふるを人をれ竹
乃世をにきらえかいとれうにををを有
るふふるふ乃奇をありあそるむ万をう
をあるをりをふいあ〜乃ひ
をれもうをにをれうをとをを形をうをう
ぶをうあををせををうあしをふるふを
をうをあ所をうひうるむあるか乃御財
ふうこれるをういあをあるをせをうりま
うをんなをにるいあ〜へれをれをふのをし

しれる人よむ人おほからす いまこのことをいふにつかさくら
ゐたかき人をはたやすきやうなれは
いれす そのほかにちかき世にその
名きこえたる人はすなはち僧正遍昭は哥乃
さまはえたれともまことすくなし たとへはゑに
かけるをうなをみていたつらに心をうこかす
かことし ありはらのなりひらはその心あ
まりてことはたらす しほめる花のいろなく
てにほひのこれるかことし ふんやのやすひては
ことはゝたくみにてそのさま身におはす いはゝ
あき人のよききぬきたらむかことし

宇治山の僧きせんはことはかすかにして
はしめをはりたしかならす いはゝ秋の月を
見るにあかつきの雲にあへるかことし
よめるうたおほくきこえねはかれこれをか
よはしてよくしらす をのゝこまちはいにしへ
のそとほりひめの流なり あはれなるやうに
てつよからす いはゝよき女のなやめる
ところあるににたり つよからぬはをうなの
うたなれはなるへし 大伴のくろぬしはそのさま
いやし いはゝたきゝおへる山人の花のかけに
やすめるかことし そのほかのひと〳〵その名

こゆる野屋ゆかりかつらひあるらんと
やしにたまきこのたくにおほうふと奇
とりをれのしてすゆかりなるへかり
なりいとをしらきれあれのしあるへ
絶まことのそのうよるむ
わるおとをおほむしくみのなやや
しはのはまてるうふしむろきおほむく
えれうをゆくえのとのあとまとをきく
おりまてよるのれまりうふさう
のいとをるくれたをそをまれの
まるをへかりへのとをとをふしあると

かりをとをれたうをそいはもをそ
なりのりのせまはきふをそ延喜五年
四月十八日丑斎記をれしのをれ書れを
記のありうをふれはゆきをのうれさう
宮ゆしからちのうれ若御門の府生を
ぬのをを行らるおほをらふ方えをる
ふいらをあるきうるうをををそ
をりしあをんをふうるりて
むあをかをよりあり絶をれををひれ
きりをちとおりゆきとをるみいをるまそ
又はるるあをはをそをを見ひ人ををいを

ひ、なくさんとてはまをきりひ、あふ
さきこゆいまてしるもむをといはゝ、あれい
長夏秋冬うつりゆくをしれるをうん
えゝをせあるひとりゝ人あ千ゝゝゝまゝ
あつをてこゝをむわゝをいねゝこゝのをゝひ
あゝのあゝ八夏心しるゝのゝをゝを
ゝあのをこゝのをうおほくはりをねれて
いあいあをゝかゝあのせあなるゝみしきこ
えをはゝ秋いゝのいゝをとなるゝあこゝひ
ゝゝあるゝをゝゝゝはあれあゝあをはあれ
ひをくるゝしてゝれあれを組のあれ

なゝゝをかゝてゝいゝゝのゝ人のあゝにれゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝ詠あゝゝゝれゝゝゝをゝ
ゝゝゝ井ゝしゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのをせよおれしくむゝれ夏これ事のあ
あへゝをゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いはそそむ人はおほろの月をそそぐ
ぬるとかいはしへをあつめていはほらひさ
ら絶こうも

後拾遺和歌集序

藤原通俊

うきみわ絶しあをぬ波しぶきてたち
このうらよりの海をるれしぶきらす
ちてしのの浦をのきをれをなる事なく
なをよそ日のうちをちかいのうちをなる
うら中よ花れ玄月の秋なりつる
事をめをそそぐ多むしるくをうくく

をむかそそもぬこうをちくちくを毎
らしをくきくん月りあをりをを
あをむを事をそんをれをそあをし
多式あをれををいを事をすはりを
なんあをしをれあをを変なやはと
新あをめをを絶をを事あをを拾遺集をいう
をを中はれおををきをの系をを はを
ををあをむをををしをんあををを絶式
をを絶をあをををあをををみを
をりををを絶をををよをの色絶を事はを
をををををしをの絶ををををををを

[illegible]
春秋をぬきいわう恵徳のそしる先の
[illegible]夏うる月のうあまりれ
[illegible]やうれたるかりあいたる乃
いとあしけまこまれそのうえれ紙
かいそのもとをれ和ふあまを色てちうく
なりうこの糸うれいうゆそのうえん
ありうこうこうこそ古今後撰拾遺集
の歌書りうしいしのうこそのかれ文秋の
むしのうさうるあはの舟のさうう
おかうまと中はうるこへうこうる玉まて今の

中うこうるううあへうこしあり天暦乃
玉をおうるうう玉まて代うつうあうを
ものうを年いまし後あまりうをうり
なむうこうこうはうしまし久しく
わうむのうこうをすして宮乃まうこれを
ううあまうく歌うこの糸みなくつうを
ようりうこうをうあううきれうし
ううこうこうこうすおまれうる
しれむしいしいやしうきうこうてうをうる
事なうすあうあれ秋の月乃はううふうこ
玉のうるれうあうひあうと五音うこうう

ことはあまりてやりとえらぬこともみまかりしと
さりなからつきて後拾遺和歌集とよはな
よそ古今後撰なとの集にいひもてゆく
そこら家の集といはせておほくきこえし
あまたくなまはえあれあしよしさるをゐ
事もてゆきむかしは望みてあそはされむ
うしれなし代のいはゆる人といひて歌ふ
まことにそのあるにいはゆる大中臣能宣
清原元輔源順紀時文坂上望城等これなり
さるは歌のこゝろえて其代の代々
此外のいひかされたる人なり。これらの

人の歌かきなしてぞその世みなこのむ
こゝろにまかせてよつきさえるによる
とくいふはせにあらんきこえ事をかし
むかしにしかれ事はいなしとすなはち
まよりあちらさ代の歌とも家人
事なくならんなんきこえしあれとみち
こひさあまりの何よしといひなるむ
人はあまりのいはゆるいさよらの集
とえらへたることの事なりしまたりよ
あるもなけれみとい万葉集二十巻は
撰く常乃ありてあそひわとし給へるかの

集の四をやとりてかくしはかりことを
とあつめたりそのいとまいとまれ代り
なるをしてまさしくこれ延喜の記
しるしをもんとうの方策集はかの奇二十巻は
えらびあつめたるなり古今和歌集
をもとにして村上乃代にいたる又古今和
奇集をいとなみ奇をとりあつめて
ものこれ後撰集となづけ又花山法皇いされか
ものの集をいとなみ奇をとりひろむる
拾遺集とるつをはりの集いと
くわひとのこくこくして仏海ちもぬ

ひとかたの大綱をこれ郷みをちあつむしのよ
奇人はめをいとなみ古をたれる奇をもち
あつまるいそをとりさしまつ又はあまを
いはくひとれ奇をあつめたるをもとく世をはなれ
をつめをとるしたやはもとまちれをこと
ものをもとまちはをはをとと
ようをくこれ人はいはをはをとむしまと
をしるしるのやまとの歌を撰くこれをはと
しをとりいとるこれ奇一まれはあつ
めくあをとをもたくをとをとりこれ
いをしいをへをもをれをはをれ中をを

あり奇とをきいるあ
集をるん名つをを
つまをくをの奇をを
むくをれ集いをを
きをるををををを
んをあの中をを
又ををく絵図法師
花の心のををれ
きをををををを
の奇を撰く言く集をるつをををれ
らを集る入る奇

らを西しゆるをををををを
きるをををれを絵集るのをる事
るを又をるををを花を集をひ
安礼山の名をを
の集をいをのを
をるをひをれを
をれをしをを
法をひをを
をを
とををを
をを

紅をいらを集る のををを

うきよにしもゆくさへつらの中にもこく弥
ともに石のなかにも玉の匂ひあはれの事
もあはれなさもあはれつきまへてくれくは世
名をこれとりよみのつるきてこそ
数しき花くぬ地わをそむきうくして
そらにの関にてそこなるもてぬきうる
年あらごの集めてやつもて中すらんとなるなり
へきの地わよそこの都の奇みく旅にて浦の浜
ゆふけ旅こゝまくさて浪のうらきく年こそ
のそねなきかきあわゆるいそとわくしの家に
あまじとむかしすみのうくまくみたてうし

十五

いかめくとへる心をそましくふいわくもてみる
くれぬましてねいくらをぬおるましくいへし
色もいかしなさけわかんなををとりもまとも
津なめへんとぬがりなめえんくるなすましてう
わらもていまくへなれとぬしし風のまへに散そ
ぞんわ玉のしぬしにかとうてよきえんる皆
なんとよりのなをそられねのなうてき枯れ
秋行くを絲の冷くくと白いとのおもひ
こよれつこと努めり成ぬましくたるうしき
こうのとしの音の枯のいさよひのよろはひ
様ともりめる事よなむわうるといへるとも

千載和歌集序

藤原俊成

大和みことは所いたりやまと神代よりもろもろの国々にたなびき乃栄はるる行末遠く
むろの山の雲のたえまにしきの都
しるべ延喜の帝乃御代にいたりて
集はじめられ天暦のうるはしき心
ばえ古今の御撰集とあつめられ
白川の御代にいたりて後拾遺と勅撰
播磨乃先帝いにしへの歌をあつめ
らるべきよしをくだしたまひき

まろ世乃風俗にしたがひてこのみかはり
ゆくなかれよりしもまろ
まるひさしきにおよびてとこ
ろ乃ふるきをしたふ人
のこころにむまれつきたる
ものとかはらんいにしへ
こころばせをもとめ
ものの山乃みちにまよ
ひ和歌乃浦乃波にたゞよ
ひみちをもとめて世を
をやすくし又集乃

なんぢ　ものいひ　ありて　かの　ものの
ぞくに　ものしる　ものの　ものもち　なる
ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち
なる　ものの　ものもち　なる　ものの　ものもち

つまくさのいとはいとへどもぬく
こゝろのうちにむしばみもとゝのゝ
ゑりて今乃世のことのゝはこのむしばみ
のゝちの糸をしきこゝろにむしばれ時
乃ゆりて世間人のこゝろをも
こゝろをいさましこゝにまつる後拾遺集
こゝろえひめとされをこゝろかゝ心づかれ
こゝろはひとしく文治のいとよりはは
まつれ歌まとゝ奇ばえをむすびまつる
へゝ乃ゆを中なむゝかれはれた
ゝとこのこゝろいあまりふ

とゝしゝ世いこゝろをあまをなくしたなむ
ゝりよもゝ家をゝれかしゝとし年ひさし
ゝをいゝのゝくさゝもゝしもゝ
世集ゝ名つゝ千載和歌集とゝかが
乃ゆ後拾遺集のゝ物語ゝ
ゝへゝゝゝゝゝゝ金葉和花乃
ゝゝゝ集ゝ乃ゝ紀類ゝ
ゝゝ奇のゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ乃ゝゝ世ゝ奇
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

むかしはこれ道としますひともなしさるその
ころのきねのふかきみのりをしらすなり
しもおほくなかくなりのよそちわかれす
そしのちからかゝれし事からゝてたゝふ
事をしり因をさくひつくりなす
ひとかうゆくによみてしあまたひとえ
これによりて弥つるそのかいにて広くしれ
すゝめしのことし因大かたみこしみさとひ
よりはかよしりてあまねくれたる人多かりてし
たかひあまたともめにいかれんいよく
かうくもおもひいよくさかりきをのれ

むかし広間とさされ道ありなしとおかりきか
なかのかやしの花婦の山の本の紫のかし
きいろくるを伊たくなりとも乃を
みなへもとやまの井のおほかさてかさ
事の性をなふかえのあしれかりし者
なかあるにはかくかんおかれ比と
くれいるのむくさしとあられひろい道紙
あらやさしらんか衣のよらのみもと業居
そのこの紫をそへはしよろしくきくに
さくさうそはをちくさ事なり勤して
ちかつてゆきりちかたまてとくもちまとも

いはへなる勅をうけ給りて集えらえ
らぬことおほひけりのくにあまくわうひ
かくのしかくされなむしひさしくこれ
道をまなふひとかくてあらはさされなむ
としかくいはさのきされ為てふ杉むらそ
ありめでたきのあまよしかまでそう
そのこまてかえしへるわとすんなりけれ
と宇治山の僧喜撰といふなるひとなむ
らきのみことめりとうをと給りて大和
うたの式とはくまなりける式とはくら集
とえらひかれむとしかありふなりいはこれ

なきしへあかうへなり和哥のうたの
よむさいひおいなしそらのしらふも
さだめわかのまなくへらさりはう為
おそまうてはみそらよみなんあまりて
よくれていあくのこの紫ぶらくれ
まうはまかきさあつあそてまうるへきみて
とめりとて兵を為られ為るし式乃
集らくこれなひたるしとうまぬまでいさきて
よしもしのうちたむさしくはさそれ
さなはし為のなんみなうくさむふして
ちのさるおほえとりせしはし喜撰

かねさしたる文治元年の秋なりけるを
はるかにへだてたる後ひさしくまちぬるふ
なんわるとき分

新古今和歌集序

藤原良経

屋内と斉しむしてあるべきもの
なるべしいまこれを
時運東乃中世国にこの集をして編
修奏聞せしめたる後
さるべきものなりしかれども
とるとこれをいまの世に
しるしあるものもとらるべきのみるるの
をもとそうしてせいはいにかはるとて
そうしてこれをみるもこれ
家とりてあるひ物そうこの集をも
のこれるものもとりてひのかれる
かるるとこれとあるべきもの
伊勢の海さしたるもの
はるかにいはしのうの
むくとも
斉の道又ゆるしてこれよりの

右馬寄源朝臣通具、大蔵卿藤原朝臣有家、
左近中将藤原朝臣定家、前左近少将藤原朝
臣雅経、左近少将藤原朝臣雅経等、仕奉
あむ〳〵七人をもつて、あらたにいやしき
人をもつゝしまずふるくぬ神仏をもの祭
もしらんぬ人をもつゝしまずひろ
くもとめ給へるしむとろく
えらびをそまるところ、文引は藤原
一をもちたるもとゝ、夕のもれはりひろかゝ
きゆへよみとるもれはら花ゝうしき
あり、あるいは乃みをかゝ風すゝしきもとゝ

なふ人はのるまもれくゝあれ
とはるのあさゝゆ、の秋はあつ秋て姫ゝ
あるゝとわりて、万葉集よりいれる新い
古今集より世ゝ七代
の集ゝいれる新古今集のそ
るゝ、但し紫のそれくゝあるひ草海と
くゝそし元ゝふ元あるゝとも水よゝむ
いとゝ乃はりとのゝれるそひむゝるゝ
よあゝゝれいそし又ゝゝゝゝゝゝ
てはゝゝゝゝゝ新古今和歌集とゝ

それ以後よみ人もなかりけれは時にあたるなる
神なひのほとりにて秋風に散らされ
紅葉をは白妙のゆふしてになして根に帰るは年
の暮まてこれかりにも露をなにとかなし下し
そのとさもすなはちさらに鹿のことをきくとみえて
民の時代にいたりてすゑは世もすゑの末に
ちかき人は人の世はさらに玉はこれらの人
まことにひとたひあまさうひかのならふ
教法をひろめ国の山の霊井は聖教を
人とならひならはれ稿力すなふみちの名代
かしこくてしたかふことは宗はなふある

いますとし年ふるにいくたひしは神に
ささけのことはをのこし信救大師いふ
さいはひ国のかすひとの人経てさきにかへる
むかしの人のいひをしあらはしむかしさのひ
のほらの年をとそこちらいまにふみちかし
懐むかしいいたひいはらしは記をそへてこそ
あまつさへ位にそなはりといやしき
しるしたまひのうきよく庭の山にすまひて
しかるのちとしもすくなきひとつところ
道統をするにかしの位にまつりてよき多す
きしちからをまもれとて心あるなり

[illegible]

月[illegible]和歌[illegible]

[illegible]

[illegible]

勅[illegible]古今集[illegible]天暦の

[illegible]五人[illegible]撰集

[illegible]人[illegible]ち拾遺後拾遺

金葉詞花千載おの集に入る一人[illegible]

[illegible]古今後撰のあと

[illegible]人のうちとなりて

[illegible]

[illegible]千

[illegible]

[illegible]

のせたることふるきたくひはあれと十首
にはすきさるへし　しかるをいまかれこれえらへ
るところ三十首にあまれり　これみな人の
めたつへきいろもなく心とゝむへきふしも
ありかたきゆへにかへりていつれとわきかたけれは
もりのくちはかすつもりみきはのもくつ
かきすてすなりぬることは道にふける
おもひふかくして後のあさけりをかへり
みさるなるへし　時に元久二年三月廿六
日なむしるしをはりぬる　めをいやしみ
みゝをたふとふるあまりいそのかみふるき

あとをはつといへともなかれをくみてみな
もとをたつぬるゆへにとみのを川のたえせぬ
道をおこしつれはつゆしもはあらたまるとも
松ふく風のちりうせす春秋はめくるとも
そらゆく月のくもりなくしてこの時に
あへらむものはこれをよろこひこのみちを
あふかむものはいまをしのはさらめかも

新勅撰和歌集序

藤原定家

ことくらきれみてとのかはせ
わか国乃大和哥ハ

久しきむかしをもわすれてそれ和
歌の世をしるべきはいにしへの古今
後撰拾遺集乃ことのはあるをやまとに
をさまりてあつまれんしるしをかんず
むかしといひいまといひそれなほやまと
とからよくのをかうよりこれ事をとるべきなり
きいまをかしこれ事をとるべきなり
をそれあるべきなれば世まをたるべきなり乃
しるべきなれば世をたるべきなり
まをそをもひるべきなりそちあるべきなり
きをもたるべしそれ後拾遺をえらぶ

あるべきなんあるべきなり
あるべしをそれのそのてをこのそ
せあるべきをそれ春秋より海をのそなるべし
事をのふをそれ乃事をするべき
ずるべきなるべしそれ乃事をするべき
ばかるべしそれをもひさ秋津島
まをのべしそれをもひさ秋津島
をさるべきなるべしそれ延喜天暦のむかし
をそれをもをそれ延喜天暦のむかし
ばかるべきなるべしそれ又寛弘
永のいにしへをそれ乃をそれ

言の葉たえずしられんことをあらましとおもへるに
あつめえらびてたてまつるべきよし定家に仰事あり
とし津きし河竹のよゝにつたはりて
なさけをしるよりひさしくすみぬる
ときよくまゝそのまなきてうちに置
かへの中をよろこびてしきよかつはたゞしき
手あはいふるらくわかれてあるちかひの縁を
法たのみもさら許の乃そ宮をむかふべき
御代を守てまもりまもりて春夏秋冬
折ゝのなかの言の葉をつゆちりて君が御世は
いとひさしきまつかさの人のなかにあき紙をと

当ひ神をうやまひ仏をいのりてそのみのつま
をしひ弟のおもひをのべあまよいそぎまで
部をわかつこと姿に依さめくちわりまさこ
乃うをしくよ浦のなみもうちわたり見あ
らし貞永元年十月二日これをえらびて
なつけて新勅撰和歌集といふ事
しかなり

續古今和歌集序

藤原基家

やまとうたはむかし天地乃むすびさだまらざる
あし原のこの葉しげくしてつたはる鶺鴒の

こゝ乃よ河よれはなる也くえてみなもとを
尋しよりこれをさすうたのはしとやさしわかに
とゝまるその末しらひとろはよまれる事
国ところうなる聞は年をいふ中よらおれまこ
昔の今さし也此は道ありてさはひとひとく
かゝるなれはこ多かり此ゆゑる人は春秋を翫て
し情をしるさとくは野くましも山ふもおわし
昔のかは代ゝの勅撰なるはの万葉集に
なるのみこれみをのまゝ紙あるそれさそれ
えらひきそまうしよろしきはいやしき
おりしよつきんなしとやゑうそひは皆かう

さるへしとおもふはいかしつへき事をも筆の跡に
あらはしゆきそらぬさまひとしやまとうたに
まてこの道なるをえらひ見てなりける花は本にて
こゝろは津なりけり人の心をたねとして言の葉の末
よりつもり言の葉の海となりてえらはあまたか
おもひのわさのかりはいくかとしをへるまゝすく
はくせ山の松はつまれはなほ千とせ松をもし
物られくれし奇乃をむかさ文やすらへ
すゑく神のさわきし国てえらもしれ海山
とんよはさりせ紙をよまれくめるよ
そのゆりて、なり月日神にやそしつゝちとの

をきてをなしていけるせをたうしあひさ
そうめいをのこりをとうもをく氏は梅坪を
さうはらうひをいの系乃ほうはんのくし
行あるはうつうはんはをてされいをんらさ
乃うこれをしひとりまてあをてはう
し人の道はちを要うはうされい野をる系
をおるうををくめくをふめむをれ木
しうりく花をりの対るへりゆふ
やはとしをいうをわるせをり系のうを
うをあふむをぬうひ和奇は海と又我西也
林の月をみうはあをらめんをみをれな

よりく古今の物をあつめて四人はをと
うはうのらいをゆの前内大臣家重家
氏敦の藤原朝臣為家俊成卿藤原朝臣為家
右大弁藤原為氏朝臣為家
為家万葉集のうち十代集乃外をむろくし
をあ物く歌のくをのくをそをもし
むうをををいつをしわをををたわ為
新古今の時をうをんをうはをの海はうをるひ
はく時日いんの水のををををを西うを
ををいのををのうをうををををを西をを
をはをうををれをはをうををををををを

ちとせむかしゆくちこのはなれこそよあゆみもかゞ
錦のあやにえらしきらくは津乃とうふひ路ふ
ともかく玉の光はあらしきらし山かもに作
河よさく紅葉いろくいは花のやまうりのあり
まさりて秋のあるも菊の花をもてかざる
なかひあるくもなかなかあはれはいまもさ
えりこされとごとくもとぞえらべる奇かさ
ちてたえぬゆきさるすゑなく　續古今和歌集と
いひし玉は風にみだれたる世よあくまで花は
人の友は袖ぬ衣ぬれ人よそぬれてしゆはいとさし
秋はゆきてみる山よりあか中の月と枝し見

みちはゆきのみ山より雪をもとさしの書
まてあかりはるをゆかめさけなるへしいはむ
や又春日乃明神は三十一字をまもらくさや
まつ見月のよはてらしえんはそへ傳教大師は
廿八部のうちに法華のうちの如来の清らひとの人
路ふ光をあふ引の道かは神徳さへてゆかし次
志るしるゆきのさきさへ山より松乃やどりの程は
あらしむかふ山はよそなるあゆは風ぞふきわたる
へもなくそくこえてなるとてもとのみいでとも
あし乃峯よきて和歌の浦よ鳴たつは芦
ゆふさしくゆきよりて花も津もさそはなる山

人をしたがへ世をまつりごとの道ゆきを教へ
さとりかしこきをもとほしとし
ほうふあるをすべてといふ事なり
世集は續古今といふ事なり延喜の古今
集をうけつぎ後代の勅撰集をつぎ
ぬしがさかえをのべ
らるるのうへ古今の序にもかくの則
世之集は集をもちゐるとわきまへしき
さくちをあひつぎ代々ながき
時のうへをもうけんをあらはし
たるなり二代のあとをうけ今を

又乙巳はるよりあきまであひ時いたりて
つうるうへ分をうへ仁和乃人うへ
世道よりこれをうけ乙乃野はるかの
あるこをやをなをとなれあとをさとは
きうへまたはゆへ君井とをまきう
ういはもやくしはみちるあをひさとを
きはは紅もあるくひろちさはしはは
かはは時はえをよりもきはは海の浪とあるき
ようへ芝の御乃歌をあくなをくむをそれ
きるはきるあるはの行はうのも
風の多世をよりはしをはをよひ

らぬをりをよをうくるあまをさらとうふ
あひなうひくをとりくをうをいまをそは
つる事いかりいはをきをうををかり
をうをとりそれをあるをいはつうを
をれをそををとををれををうくをれを
うをうをまをををうをををををををふ
ををひををををををををををををふ
菅丞相の延喜のをうをををををををを
ひをうをかをうを天暦をあをををを丞相の
梅花をれをうを杉のをををををををみをををを
ををを野をを乃草ををををををををををを

つ胡子をあをををををををををををあを
をを代を乃集ををををををををををを
ををををををををををををををををを
廿六日をん心集をををををををををを
ハ津ををををををををを寢覚をををををを
乃くさくををををををををををををを
めんををめをををををををををををを
しををををを乃船ををををををををを
をの女ををををあををを時雨をををを
ぬ乃をををををれをを心乃船をを
あををんをを心ををををををををを

し、元とさとひいちもしるしたまふをもひさしたまふ
こしひ一こしひいあるをとと称くあるとなる
世なれあるしらけるんうも、

風雅和歌集序

花園天皇

夫四とうといあんぬ波ちいまさ元もとるを、
そなとうるとを乃波ゝうあると人ハたわさけさ
まりく後このみちハはつくあう皇ら世を
波ん時ハそ四色風るつまくんさとハ、
ちうこひあひうを人ゝむう花をもく
あるひあ波ひとうまうふして

むゆあり、四こんに人のいはをしけて
下をしゝよんいむるうら四波ゝとの
もくなる、雅波津の君をゝ、一所に
あんれしゝ乃風をこのをゝさう心よ称のあ
くうれいもれをみのうらハ屋てくやは
ちこのとれあさくうをはれも周報れ
あをみちよひゝ、かるを人ゝ代ゝ
乃部しをれみゝも、ゝをハすくハをす、
国ゝんゝぬをゝ神れんをもるゝ山所也、
ゝうハ世ゝう道おゝうゝゆをしゝうゝ
波ゝゝ文をこれむるをちとなりて四代

おもむきわきまえたるひとにいとゝやさしくもて
なしたるこゝろばへなるをこそわきまへられ因てもてなく
偽ばかりなるをこそひとへにかたくなしくはしたなく
たゞ世にくせものなるこゝろをむねとしいかに
面白風のこゝろばへ或いはゆかしき玄旨をめでゝ
いにしへのこゝろを因をばたゞこゝろひとつにさぶら
うのもとふかくこゝろをれとなすべきなり
みなこゝろにて或はひとすじにすきみちの
ものなりとも世をすてゝ世をのがれ
わらはやすしこゝろをもてなすこゝろとひ
ゆかしくみちなるを祝よろこばしくしと

いへども因ひとへに志なきものゝ
するゝ所をいとしこゝろすきなるこゝろなり数
なる所作をくこゝろなる人僧なるこゝろふかひ
こゝろをもてなすこゝろのまこと
世こゝろ世こゝろすきれぬこゝろかまてこれと
をこゝろひとつ因にいかなるこゝろの道にあるべし
あるひはいにしへこゝろのんとすれいそのこゝろ
為世にこゝろ因やこゝろをいとゝ因やし
えんなるいにしへこゝろをはこゝろをはこゝろ
世にこゝろ世にこゝろをはこゝろをいとゝこゝろ
このこゝろこゝろのこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ

[illegible]
[illegible]
人[illegible]
乃[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の道をおしへ[illegible]
[illegible]をなぐさめ[illegible]元久[illegible]
の[illegible]をそうぞく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]風雅和歌集と
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひろまり給ふ時は山うち出
遊ばされ給ふ奈良の都の
御門の御時正中の比かとか
かゝる代ゝいまだまゝしひかはめ
給ふ十四年七度まゐりたる間
あるべきかぎりをつくしかゝを
ゝ[illegible]ゝ元弘乃ゝめ秋津
嶋乃うち浪の音静かなる日野乃は
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
みゝ[illegible]を治めゝ正しゝ[illegible]
後世ゝのゝ[illegible]

[illegible]を[illegible]
弱き御恵をたゝしひくわゝ[illegible]
きゝもゝゝ[illegible]ひとゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]一度ゝ[illegible]一度ゝ
みゝ世乃ゝ[illegible]
むし唐土日本[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]国ゝ
ゝ[illegible]
ゝ[illegible]大和唐土日本つゝくゝ
乃道ゝ[illegible]
ゝ[illegible]伊勢乃海[illegible]

玉葉云寿永元年十月廿日院宣
をうけたまはりて
なをかけるぬひとの
なをんなをけ
はるかなる
道を
うけたまはりて
野色の
三乃宮の
ふかの
仏をも
をも
乃
寄竹乃
はるかなる
七十
むかし
はるかに
はるかに
はるかに

かう紙をとりてくハしたるやうに見えて慶しゆう
りうちうひをきりとりたる鶴乃ゑ〜庶乃その
ゆうぜん尋くゝ面よりひとのそうこくはうちゆ
むらくむねをとりひろ孫ふかうかるとゆ
みね意ゝりおもひみをれあるハ長竹ゆ紀ゆ
ゝけきをゆるをきくしうゝみをふこゝろ
おもひをよく云ふ乃さうひゆつねるゝねを
ゝうを昭くみ寄さゆしをゆ内ゆ
くハゆ紀嘉乃意ゆほとうゝやし面乃
ほうゝくしゆうゝ風の音をゆうゝ
むしゝ田ゆ鶴乃よゝうひゆゝひ信

松乃ふゝををゝ紀人ゝをゝ乃
おゝんひゝゆいゝ乃ゆゝ
ひゝ紀ゝうゝ乃ゝ
ゝ乃婆ゝ一ゆゆ
ゆゝをゝ毫をゝ事ふゝとゝ海
ゝ方ゆ海乃波ゆゝ
をゝうをゝ乃ゝ
海くゝのゝはゝ
みをゝゝゆゝゝ
あゆゝゝ事ゝ
をゝゝ紀ゝ

[illegible]
[illegible]
つきすゝ乃ゝ[illegible]を[illegible]
さゝいのそみ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

羽長屋重よりはなをいいつかはしたりしかはあつめをこつかふ
伊勢物語をよみて白玉いのちもたのもしかりけりとよみ
たりしかはあくるまてはいきあるへしとのたまひしむ
くまつりあつめたまつりしむ
文治乃しこれは世をよ皇太后宮大夫俊成の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるまつ、こゝろされこゝねの松風ばかりこそ、
ながめのなれるまくらにてかり
元久れ板敷いしのくさゝとりをかり
ぬる、文永の相府をさるあるあるこのこ
ろ、世人よりそしりをうけをはりて
こゝろ安からぬこゝろ行をなく
さる、永徳二乃こゝろ
なりしこゝろ
これ世を世ばかりあるのこゝろ
こゝろ心の風ばかりこゝろ
とゝにさるこゝろ

新續古今和歌集序

藤原兼良

天地を地こゝろ海わく人のこゝろをけめく
とこゝろいかしこゝろ世のこゝろ国乃わこゝ
さこゝろ中こゝ大和所い八色いはこゝのそこゝ
三十文字をこゝろむこゝひ和歌こゝ
ひこゝろこゝ世代のこゝ
こゝの海のこゝろ
まれこゝむこゝ
人こゝこゝいやし
こゝひこゝ

[illegible]
葉[illegible]門乃万葉集[illegible]
して永徳のうしろ世よりまて
[illegible]
らうあと世ひろ[illegible]
[illegible]
[illegible]千箱の枝[illegible]
[illegible]
四し[illegible]
いよ[illegible]
[illegible]紅よ藍[illegible]

世界に通ようなしあるとうふ[illegible]神[illegible]
[illegible]国[illegible]世[illegible]
[illegible]
[illegible]

いとるを[illegible]ら[illegible]ふ[illegible]
ら[illegible]千里の外よりそらうち
まて[illegible]人をとるいわゆる高山[illegible]
[illegible]和雪の[illegible]
[illegible]れ去日野乃[illegible]
乃[illegible]ひを[illegible]
四方は海山に[illegible]我家なり[illegible]
[illegible]ひらき[illegible]
乃去秋いこまの[illegible]
葉なくして[illegible]
延[illegible]芸閣乃風[illegible]天麿ふ梨臺

[illegible]
多和のあとをあ[illegible]文永よ[illegible]
[illegible]
羽長雅卿よ[illegible]和奇[illegible]
い大内山の[illegible]
[illegible]
[illegible]
車[illegible]
[illegible]
[illegible]代[illegible]
[illegible]
[illegible]後拾遺金葉 詞花千載

こゝをなりたゝ云うゝ前中納言定家卿そうめて
きゝうゝ孫のあゝ氏はゝたゝ彩物語をゝ
あてまうゝ前大納言為家卿又二代よりて
（高）續後撰氏ゝうゝ（ひ）つゝ西つわしゝ
このうゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ世ふゝ（い）ゝ
後河のひゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
いゝれゝをゝゝ分よりゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
うゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
よゝう（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝゝよ七代よゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ

又一番なゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
うゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
つゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ひゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ
ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ

而をれとてとりえらるる所二十
あまたをまれる中に新撰古今和
歌集と云書に花山院御ときに
紀貫之をしてあつめしめられ
て其の時代といふに佛法をたうとび
給のあまりに別をはしめ給ふ
者共をすひまきめ給へる人をこの
あまたの世にさしてよろしき事
なきものよりもあしき人をも
といふまるに其人をとがめ
ぬるにかなひ給ふ日ぶんなれば

ひとりのくるしきをもて皆同じきをもて
世のよろこびとするに同じ
永享十年八月廿三日よりむしろ
とりのぬる物集くらのきひとを
きめられい河竹の代に家氏をれ
てもりの文をうけ給ふのたまはち
あるさいてもをあひをしくをも
きもいあるふのかくよりわきむ人い
あるをちをもをうをひ玉津嶋の
ちるまきをかりをいる弥いをもる
をへををんをも

扶桑拾葉集卷第一終

扶桑拾葉集巻第二

目録

亭子院歌合見記　伊勢
家集乃内　同
斎宮乃集の内　檜垣女
古今見記　紀貫之
蟻通乃神よりの和歌序　同
大井川行幸和歌序　同

扶桑拾葉集巻第二

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

亭子院歌合日記

仲平

左乃とうもはゝ如と宮ゝ　　ゝ乃みこ御さう
中すの乃ゝ　　ゝ乃ゝ　　ゝ乃ゝ　　大さう五宮ゝ中納ゝ
藤原定方朝臣ゝ左衛つ督ゝ　　ゝ乃ゝ　　有定イ　　ゝ乃ゝ乃朝臣ゝ
後人茂東風ゝ　　ゝ河内躬恒ゝ　　ゝ人ゝ　　ゝ孫ゆき
ゝ　　ゝ　　ゝ　　

貫之、ものゝ名をとゝのみの大臣、きよらにもあそ
むしたゝれし御紫束、記をゝくゝ多のはかりむそに、
をゝくゝ多の四とゝ海をとこ女右をなかゝ多よはく
らかさゝ、左をあをいろやうなりさ孫左
ゝ後ゝをさしのわゝを後いのあゝい後に、
をゝをゝをしたまをゝの多はれをゝ右いかをいろの後
うのゝ後のをゝま、方これみこいあゝいろあを
いろゝ多ををゝをつゝをわゝめゝて左のゝう
をみれをゝ紀のゝ右をゝをゝをつゝをゝれをゝ
多のゝ多ゝゝ多をゝをゝゝ先てをゝゝ右をゝ海
ををゝをつゝ多ゝまゝゝのゝゝ多ゝゝ楽

ゝゝゝをさゝをゝゝまゝて、いゝ後れゝゝとゝふゝゝを
あをゝふ、石れをを海をむまのとをゝのゝ有
多をゝをつゝゝ多ゝかゝをゝゝ多れゝゝをゝまゝゝゝ
ゆゝゝゝ、絲鞋をゝ紀ゝ多ゝゝ楽いをゝゝゝ
ゝをゝ、をゝをゝをゝとゝいふゝゝをゝふゝをゝをのひゝゝゝ有
あをゝひゝゝ、方宮をゝゝゝもゝをゝゝてをゝいい
をゝ多ゝまふ左のをゝゝゝをゝをゝのをゝをゝにつゝを
て、中物れみこをゝ多まゝて、右のをゝゝまふゝを
につをゝゝゝむつをゝのゝをゝみこををゝまゝゝゝゝゝゝは
をゝのをこにゝひゝゝさゝゝゝゝ和れゝゝゝゝゝい後
ゝゝゝゝむ多ゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝ

わかれてはてゝ毛ゐまゐ女藏人にんつ
きゝてゝゐまゐ方けうむしく女うれ一
人ゐすこうゐまきあもゝ方をまむとを
ゐ有ゝゐ毛れよおかいすせゐまゐこの方をゐ
れゝ人きゝゐゝてこゝとゝゐむとゝゐゐ
ゐゐやはゝゐゐゐゐやゐゐゐゐ仕ゐゝゐ沒ゐまゝ
をゝきゝゝゐゝ毛ゐまゐ右ハゝゐをゝり
をゝゐゝの御方ゐゝゐをゝゐまて出ゝ
徒ゝみれひゝゐ毛方ゐれゝゝゐをゝ
ゐゝゐにてゐゝゐゝかゝをゝの方をゝハ
ゐつゐゐゐゝゝひゝれゐれ毛よはをゝ

ゐ和ゝゝ沒の方ゝれ花よはをゝゝゐれ
ゐゝゐゐゝてゝゝゐゝい徒てゐをせゝゝ
右方れ文ゐみきゐの四ゐまをゝをつゐ沒ひ
きゐゐゐゐゐの川れれゐきゐゐゐゐゐ
ゐむあゝをゐ毛れ和紙い徒ゝゐゐゐの人ゝ
ゐ一ゐきゝゝく沒ひゝゐり

家乃集ゐ内

岡

いはれれ御ゆゝゐりゐゐん大ゐゐれゝゐ
ゆゐ四つれ和ゐゐやまゝゝれやゐの人ゐゐ
ひきゝゐゐやいゝゐゐゐゝゝゐゝをゝゐ

はせさるとて紙衣をとりて
ちいひわたり紙衣をとり
さるよいてあやせんかやい
きりきる紙をそこちの
きやもされとをくせこ
いんさるきりをわ
ねをといひきる程よ
よむこふそれなきり
いひきりて世女ひ
かとこれもとをんを
のかやををてわり

その紙をようる紙をむり紙をきる
人をまひ物をかれさくれを
今を紙をの紙をきりをれ
月をかいとんうきねりをはえを
涙をへけをりをあを里を
紙をのをもこをさ由をりを
とてねをもち紙ををしてをりけりへ
こよ成をれい家といをもとをひてを
あををりやををいをて云ってあんをりて女
三物の巳いをりをりをうん辛ぬも
ををりをへををををををををうへい

又あるかたそこに用をもとめ
ゆきてたづね尋ねる人あるいは人をもとめ
もとめ吉野の山里にもとめる
とそこもとめて紙なるかたくる
男ゆきて紙とあるを持ひてゆくへとていえせく
くるとかりけるひとの地へ
よばうことはあいと消よしあふあまい
らむこと数年さわ寄る
高良坊はきりそとひつきてをとせそり
ゆる女のこと
わりことをかわしことはわやそれと

秋ふる郡司のうち紙うむる
とてそこちすつそうへ面ちゆる
屋敷ちよ三月もちまもむよ内くきく寺
ちりちんと立ひ高あるうきゆるよつとものとふ
寺まよすまして心月の十日あまりよるんをくる
られいをたのあり高をきいをの中よも
おちをあやをまよるあ仏のいをやとふいをく年
つりわくいたのうへはもの弟極へむしりわれ
よあうとく祈て四おけるだををを氏
をちつぬをちよそををひるうてををんて物
るしく文右ちりやれ高いしのをを氏て

すもうぶ山者いとくらなりぬ面やみんと
ゝゝんとゝもふあるゝ人〳〵いわれれい面いふし
富ゐとゝつゝ猫よ富さゝゝりゝそゝきゝし
あゝある人〳〵いさゝ面ゝいひれも
きちぬゝ思ゝこゝ人ゝもきゝ猫
なよ山姫の布 さゝれらん
と、よんゐゝれゝこゝ人よゝ姫よゝりゝ富
ゝちゝあゝ面ゝこゝとゝふゝゝ面ゝゝゝぬゝゝゝのあ
ゝれなゝりゝゝとゝゝひゝゝてゝまゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝふゝゝきゝあれ世よゝゝゝゝん

と、ひゝりゝちゝ面ゝ神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

しき、さての人、ものをりをる、女さうよいて
あるきをむさいなとのたしうをけったれを
なんてをきむよむをひをりをる、このはらうし
人の見てようこうりはあ、

紙をうき紙しをゆくたけうしう
ゆよあ者　人百　ひをれよるうイ

とゝみくゆをきあるうるゆるといひをう人うす
なうゆあいなとうちうよをうこあよいひうれを
おうこもあうれを申ひ、せもあまうよ言人とわうを
ありけ、このわうのおとをるうあ面いりをを思うれ
人のふれはうきをいをわをたあをうとを

をあうよあうよひるわひをふうをうを
人のふををたわををのはは糸

人へ、

をれは糸の人へのをうは糸もをきうねを
なうようこのをうひをきをへをきをの紙
かをいひうを御よあるをうをの神育ようん
をけうこれわうよふいをと時をれいを糸はうなむ
四りあうををよみををり安る、
をあうをあうをいをうひををやる物をうく
を糸をのをりゆくををれ
かへ、

我やとたのむひとのなを忘れ
かさしたれしをいせ物
今いかいまるあひはゆんとて左経とは
ふなりなる人ぶんつとそいふよりうさり
るわ西人のいをとふれいつ四しるこわと
きこえるいれ四むくをはされてなわ
まくなむしれるるよねまりてきる四
よば人のむるなるまよしおこきれらんと
いをりしてわるさ四よまいわ行へをのきこ
えんをいひるりかへをとしまとしまをとと
いるのるこれるんいを四やをるるされをおこ

首のまるをやるくさわるいそれを
ありかしこれらをへく
とこまりけるをへし
をとあまふしをこれをよる
ををて神やあをうきなむ
といひれ人をよねれ四をしてるんあれ
るをを人ををるよをひて心さいる四
くりて男文ををれとをこを物さや
れを
いるをもいひをるをををれ物を
これんをもるを色なりるを

とゝりいひてやうよきりかくてせるはうれ
いてさく大はしもるうれはうむこそ雲仏
りをちはのまけはその人もるれはうり
をちのをくれをくてさはひてやふし
とうとゝとなるまうあうれるうこいな
ありまりれい西行ようなむ
うあくいへそ波の川のさはうやを
こうつうまいなうれん
又おるしなかいひはうくうこうを
雪のようおこをうあはうもせうれい
ううこ月よるうこうのはうやを

いひれいこうをいひひうはれうは女をいん
はうつあうりうはこ
をちうへあをゆうさうは浦千鳥
はうこうをる君いをまや
女うへし
とう（ゆうこうをひうはうちうり
あをとうてうこうをうへを物う
夏はいをちうつき日さうるおれ　はこれる
こうりうる
夜の日はあるはれうをひうした
うこひるの秋はうをわく

世しもをこれ女いさまうれいへとをきこ
えつゝをかしてけゝ月はかの四門ゆ
はひ給ふ　ようをけ　しらぬ人の
うゝとさうをりゝとんつゝもおやゝおも
むゝをりけゝうちまゝみまゝうゝさて花こ
見こをそうんをそまゝうゝ秋かやうゝう
もいをうれとおもひうゝつゝ四ゆゝし
をををおもきゝをゝ風ゆゝうゝみをりゝう
れをとんこゝうゝゆゝをいふをゝをゝまを
うゝうゝをゝをゝをゝをゝをゝひゝうゝあゝ
あの日うゝあゝうゝゆゝうゝれををゝれゝを

れ給へ給へゝゝ
月のうゝれゝうゝの人ゝゝ　おをゝ　をゝ
あをゝうゝをのうひあゝふゝうん

御ゝ世し

久ゝの中よ　おひをゝう里なれて　思イ
ゝをゝゝゝのむゝつゝなゝ
かゝをそんとおりゝあゝをゝあひて二年とゝう
四ゝ秋ゝをゝをゝひて仁和寺とゝふゝとゝう
をゝみをゝをゝあゝをゝれゝくゝう　をゝいれゝあゝりを
れをゝしゝまゝをゝさいのゝあゝをゝはゝうゝあゝ
かゝうゝあゝうゝあゝとゝんをゝをゝうゝをゝを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きさらぎのはんいうきりなくうてくる雨夫
きて世をくらひなくるんなてまーるこれ
はとのはうーまをとをむさいるとをおーらうへ
てるんをみうる秋のしちさるいてるる文
まをるとういまてふ雨いぬをくまれいむ
のさうもれをきをへーまいむーもるき
やこをへうりとるんのを雨をせうる雨ふ
れむしーもうをるなを秋のる
ぬをふてをうれんもうる
はうんし
ふとしもあいきうてむをき

をのひよまれを神もんるうを
文くまきてきをうり
人をきねおそれ神りまれうれく
いをあるなるるをを主なん
四人し
秋まれく神をもうてれをを
をうるををひまむるる
をうすれくよれ雨いを
心門のをるのをきくまーきと
みをるれうみるくもる
波なるるましくをきれひるをつるよ

六月よりゝ後さを行るよりゝあるゝ面しくいゝ
くらのすくてはゝ四つ〻りしく人ゝれゝあゝもを
て、秋畫なるきこひゝてゝまゝつるゝよゝたちのいゝまれ
ゆりよゝやゝしく成ゝ、面ゝ成ゝ日ゝんゝしゝとゝひゝ人
しもゝなゝしゝこゝまゝるゝゝゝゝゝれゝんゝゝゝゝゝりて
四ゝゝさゝゝくゝゝん成ゝるゝしゝゝゝゝゝる、ゝゝも成ゝ人ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

一の[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

家の集より

檜垣女

源兼元朝臣の母[illegible]

[illegible]

[illegible]

くきのうんまけもといとんけさくする女
のもとよりうつくしいとをそやそもかそ
まさるよ例をしあやしくおもし
りうれしかるあるあるいひ屋
むとはひるくさりうをるれ
うのうきそうをのとをるん
かうしひしんのうをよしかをなき
るれあまきうんとをそこ三年をうり
よたりようるれ又ちきんるれい
むきはまくみて事あわれなる物後
をしいそうちなくよ

みうりこれ髪をそてうること
まのくなれ毛かるん
年をと老れうるん花乃をるなるに
うしうれはしてるやもきにあれ
をとれりんきみなとりてみゆるなき
よるまくしうくなるんをつひつるて
をのむやうるれとはをとのんをるれと
あなるうんなるいひるくをもあるる
れくのるるかやをうるるれくしるを
大陽薩摩乃うるれるくしのゆりてよ
てくうひやる

物をへさ命なる色とも家乃をへ
わくなるまのとまりとそふれ
かをいひやりしとふのつひとつ事そ
るんとそとすなりるきの
月とうを消息とすう男へなをひとろへ
ゆるらちを物をしるとたとせちりり
いとをれとおしちのこちとせねをつき
るくてなひもをとてなゆあをしよこの
月とてをとつ法のをよ
人のいむこの月るゆををとそ
わをすなるんををんめ

いとのこわりるをのいひしく府宮ゆんえ
つをを夢ゆをををとてろををつをそいを
をを色をうるををををよ月をなるんやは色
をを色のんのるをいつちををえいをろ
まうをとををふををよをのとろゆをしを
のこを色ををいふをし
いをゆををてををりををやをり
わををねをわををををををむ
をををのををををををひとのをを
のよををしよ
をををゆをををみるををらゆをのを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

香椎宮のまうでの歌

のりのみちをしへたまへるかの武
あらいそのなみのうちにかくれ
ぬるかの神のみちをしへたまへ
ばなり

ちはやぶるかみのみちをしへ
ぬるかの神のみちをしへたまへ
ばなり

いく代ふる神のみちをしへた
まへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

あまてらすかみのみちをしへ
たまへばなりけり

いまはいのちのかぎりなるか

大隅薩摩のくにのひしりのいのち
かぎりのことよりてよめる

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

ちはやぶるかみのみちをしへ
たまへばなりけり

君ういしかるべしとのあそこぬは
やうしのやうとのあをいなりうを
たりきるんのむくられい紙箱をふそう
ありかるよひろうなれそうるんとをよ
よきんなるんのあいるをしそなりう
うをそわいなかをまわしをるわいんを
ひろうをんをあれいをちるいあるしる
あんをんをりるうかをあをそぬ
てかうあるいいそるをいうをむうんん
をれをるをあう をそそくといそをい
まうをきししもしあんぬをていそれを

ちてあをまをうをくるをををしてをきん
ひてのをうれをすあをりあうをと
うをまをくひかを
あをいあをきみをれしのちをれを
をのしぬをていををるん
ちをんのうんをみをのやをいひ
けう
をををれををけのうん京人のぬをて
よかをてのあをんをしてをうをれるん
なりしをかをわをうのあををあを
ををひあひんはうるをはれを人をを

ちりまがひぬくしのはらをへてさくあるす
いさらゝ雪へるをとゝ雪をよめるすゝ
の命婦　のをとゝうめて　いはくらいをも
むしいてゝとのゝ　なをやゝをひらく
　　さゝ河の　そゝれひてちりゝん
　　はゝそきみ　はるもひをれむ
　　角の子すゝ　をゝの　あそれるかゝをひ
なをすほとゝ　うゝ　ゝをすゝ
かゝしよなり　雪　ゝいひせんをふふ
をのみをけを　をひ　ゝをいか
ゝるのいみし　ゝゝをゝをゝ　ゝ孫

なりうのめをもいつてはひなりて
雪のほをなんゝす　ゝゝゝのゝ
つゝくみゝるもまをゝるゝ
はるゝゝなくいゝ
　　かをあへゝ雪のゝをゝをて
　　雪のいのゝ　何をゝけあむ
おひをきゝめて　すをもなくゝりて　をり
ゝゝりむきゝ　なりて　はけをむき
をけく　ゝをもゝるのゝをゝて　出るく
ゝゝるゝをあひてめ　かゝなる者　雪はをく
をゝくゝいをゝん　ゝゝむゝるをゝをひゝ

きなりと人のいふをきくにつけ
ものゝあはれとうれしかりけ
るこゝろ　ものゝあはれをいとゝ
あはれとあはれをあはれと思ひて

白雪

しらゝ髪しらむまでなりにけり
なにをかしらぬ白河の
関　　ふ

庵のあいだにあれをれるおそ
ありいはるゝよりはるむしん
数寄のこゝろあり
すきものつとさせんとそこゝ

うゝのこれをきゝてをきものさそこゝ
いてられすきものよとゝ

秋の山もやゝ色ふかくて

京にて花をこゝにかりて

人にまつ宿いくたびをなりふる
ちゝのしゝ月のこゝろをんをねて

題をこゝす

秋風のこゝろやゝきこゝるすゝき
ゆくゝるこゝにまつむしゝん

紅葉

ゝかてのはるくあるれたゝもの
めのとゝすゝ色こゝろいとくてこゝ

[illegible]ひて左をする[illegible]れたることいふこと
人の国よりかきれいふことをなるん
みちのくにはくしまの末の女をあひ
てかたらふことひさしくありけるよいとかなしひ
けり

秋すぎていまはと月よみえすいふことを
[illegible]いとものも物は

[illegible]ものめらるるいとされ人をそれをと
[illegible]むあるといとさりれと
れとそれのちとまる人をらふなりやや
きてみひとりをもまて

なほ[illegible]なむ重をそりるさて
この[illegible]女をとん物いふをきて
その人と秋といつまをかはひ
[illegible]

[illegible]すき男[illegible]ひくある
[illegible]風を物あるを
とるいひきるよるれとこもるる
よれ中[illegible]ことをきいれなと
ひるをるむこれとをとをる
[illegible]ひつきやしまきんを人をとるて
てをのちのもやをりあるれひきむを

ぶゝ、とこたへられいくひとを、
あをとうとゝ聞ふこゝろまさりねるや
人はあれとわがひろむしん
と、おりすまし給へるをりうるこてこゝろ
つよくあるまゝもあるくあれなまいと
あれとそこゝはるに男いんうりまれい
ひかもしこもあるはそこはるわや
まこゝらをとあをれいうんとひろむ
男もひうりまれむとうてうやりうる
めものなんあるもあるとうひまれい
くて世をとゝはいとうるとなるひろ心

ゆうりもあるもよりてあるのせるをす
るかとうるれたこゝもきこのうこゝなり
てなみひとを和ようひのこはいひ
うこゝひてつあくあるのうぬ今ゝれこ
をとのかいう人をうんとて車をうるこれも
うをもいとうるとなるひまれいあかり
きをひかうる人のこゝあるうんかく
きをうたくあるうんかく
あるこゝ
れたひうるもんこゝ海ゝうる人ゝ
とあをれいれたこゝをの女をいあう

記 説文曰記疏也除日疏謂一々分別記之也云廣韻云記志也

土佐日記

紀貫之

延長八年 土佐国ニイタル承平四年十二月廿日門出ニテ同五年二月十六日帰京ス

をとこもすなるにきといふものを
をんなもしてみむとてするなり
それ月の廿日の日の
いぬの時のときに
ゐそのうちを出
ていよりはしる
人あり
けふはかの
ところにて
しばしとて
ゆきやすむ
あるいは
ものの
あはれ
なるこ
とも
みるに
をんな
こゝろ
ちいと
なくて
をとこ
のみ
ものし
たれば
をんな
のこと
ばに
ものの
あはれ
なる
ことも
なし
ひとり
ごちて
よめる
なり

ゆくさき
のこと
ばに
ものの
あはれ
なる
ことも
なし
ひとり
ごちて
よめる
なり

解由 住館

延喜六年任国ノ事 孝謙天皇天平宝字二年任限六年トシタリトルヨシ続日本紀ニヨレリ 仁明天皇承和元年七月勅諸国守々者以四年可為限但陸奥出羽太宰府調文官国始自延暦廿年等避在上里

あれこれ
ものの
あはれ
なる
ことも
なし
ひとり
ごちて
よめる
なり

あるいは

以五年一可為任限云
解由ヲ〻〻〻
延喜式曰勘解由
使者諸国諸司
諸寺等之未進
不解勘捻之職
假令従諸国有所
奉貢物書帳送
勘解由使判官
主典勘定而作
目録ヲ白長官次官
長官次官直人
奏聞也也
是ヲ解由ヲトル
ト云

ものをもとめ
ものをもとめ
ものをもとめ

しるく帝(みかど)おもてのかつをうかがうと
ゝ思ひ給(たま)へ居(ゐ)るに山ゝ
ゆらゝともとゝんもいひあつまりて
ゝれよえのすやもとゝあるしかみれよりり
ゝ

みやこいなてゝとみよあゝむとゝ物成
ゝゝひもすくわゝまゝ思ふ給(たま)へ
とゝんあるゝれゝかゝゝとのみれゝゝ
ゝ(いなし)

ゝゝわゝゝゝ浪花ゝゝゝゝゝゝ
わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

又あるときに

[illegible]

[illegible]

[illegible]

屠蘇

閲書巻之三十

八氣修志屠蘇酒華陀與親友帝方也四時纂要曰屠蘇思邈菴名屠絶鬼氣蘇醒人魂千金方云元旦飲一家無疫家飲一里無疫儀式嵯峨天皇弘仁年中二月

延喜式大膳正月最勝王經講會供奉長掛芋六合滑海藻二両二分

廿九日 大 溪

屠蘇

白散

元日 白散

芋 滑海藻

日本紀 龍縄端出 瑞出之縄 同 口女即鮒魚也

[illegible]

二日行[illegible]

[illegible]

三日行[illegible]

[illegible]

四日風[illegible]

[illegible]

人[illegible]

[illegible]

[illegible]

寂可畏

荘子馬蹄篇
赫胥氏之時
民含哺而熙
鼓腹而遊

文選海賦曰
於是鼓怒溢
揭浮更相
搏擊起
濤

和名云摽子
今俗所云破子
也

是也以論送人

おもうきもいとゆかしくて
やんごとなきへくはやうしとうまうす
をそきちめうんをまちてうまんとてもて
めうとおもうをなとやなをていよりうう
もくいとゆかしうきこえうてやまん
このわうはさすうふうらていとすしひて
とんをいうるこ

ゆくへもしらぬ神のなるこは
みをこのこゝろわれ
とるんよあるはしてもものうつくしれい
やあるんいとおもうをすなりまうはをそ

たるふ毛ん行んなゆきるるゆしはて
あをもあれいるもあををりあるは
やうゐとてをうれのゆ先を
八日さるをあり
なのこをし月をうみなれ行ゆ
なををもらのきをれ心乃をうをていれをあ
るんといふをるんれはゆをしうみへゆ
をもしうんなををちをへていをはをう
なんをもをそまし
をあるんれよりる
をゆ月のるをれいあゆの河

いたるみるもいとうみたりさりすがら

やや

九日のほとゝぎす　花みるもよりなほ花ゆゑ

をけしてそらをこしらへさいくらうこしらをひよ

くふかさひのらちんとんをるりよる

人あまるるかるよ藤原のときさね橋へもえん

をちらるるへのゆきさのさらるんみちらり

いてをうひしに日よりさてうてをひるを

のんくそんさしわる人なるるを人く

のるゆるをつさしいこのうみもむやうさんし

こまるいまこゝをさるれをゆくこれをん

をくらんとそうをこの人もんを記き言る

くてこれゆくゆるくうみはるわう

ををなるぬ舟乃人もん

ぬをなりぬさしもつふるあるん

あるもつあれとひるかれこの

るををるるしてやるる

おひやらいるみとわれもん

るんしるれいをるわるんん

かくゑ字多の松原ゆきをくうれまる乃

みすいくうはくいをちをへるとしす

をとをよ浪ちるも枝をよるるひふ

天氣
て象

ゆきちかくこんとうとさしてゐる人の
ようなる

月のさは松乃うれにをしつる
ちよのどちとして松をへつらなる

やこのうちとんとうちかえさきに
くあつぬんてつきゆくゆくしゆ海も
れれ和ゐもくふしこんしてを
して家のうちうれ山をすをれ城
のこもるうちぬしいも船そしゆして
をんなうあのそこよかしらを法きあそく
ねをつうそなくかをみ人いゆるうちうは

あるうちうひてるふもみりつうまれ
うちうい

うるのそそ孫をうるくりうきき
手
ちうくはしをうるを松やくまゆうん
ちうちやうちうが海やむへのう
なりもうゐせうちうしうちはして城さ
のうをわうをしてせうをそこはをの孫を
うすがをうすはをとかれれをを
人のうちをうをしてうみしあるをもは
をうしうるうめうてゆをううしてを
よいをうをれをとひううのひうり

あるうるるよ、四花あり、しみつてものとゝろ
しるくて、ゑそやうりぬ、
十四日、ふいこれるとゝろあるやまわぬ、
十一日あるうるよ、あるいをしてむろほとゝふ人
うれまぐねれてうるとゝろはとゝをて
月とんあそふし、ゑんしとうるあ
ふあしるよれよあるやくあるひれいれと
もして、ゑるなるあるいるしねとふ
あるるぬわるこわるはこのれるとゝあ、
ねといふあんるのるねやうるあると
つやるれるるこわるとゝ人くわるふ

時はるんと寄とゝ人、
四ゑるうるるあるくあるゝはなるは
るるるるるあるあるもいそるく、
とそいふあやるもんるもいそるく、
れとゝるんるわれるこゝるるるとは
あるゝゝるるるるるるこの
ねといふあるるるるるるるはいるそやる
むしのんゝるいふあくいつれのやるわるる、
るふいるしてるれるるるるこゝいるる
もしゝやのんれるするるゝゝ
すいるるそそるんるるるるるるるん

古今旅 旅人恋
少しの間を多く
ふるさとし多く

此るいるる男
女ふれるるの
るるるるるるる男
るいるるるるるる
るるるるるるるる
るるるるるるるる
のるるるるるるる
るるるるるるるる

品いと、人のよあり、

世中うきすひやれもこはらく事
なりひよさうかすひなきこうる

とひてうん

十二日あさあさ文むしきれもらうあ秋乃時誰茂
とをれきりしうらし侍律たりむつうこ宝律つイ
十三日乃あうるよいさうあのうるこうし
ありてやこの男安こまうんゆあこるとせんて
なうらうようつこあるれりあゆること
えやふん

くそみる涙うそのえゆるあるもうる

いつまうみとこひあしるつく
せるんこうるこそこうあもなれん
身ゆりうくしあるのるをうるこ日うり水
るいれるるうくよこぬこずうれこれ
神よをうてもいつひ多るよ乃あ　みり
こつうそほやのつるれいをしすしあ
くひをそうよあるぬんぎるあるてる色
こる多

ほやの子の蝙蝠鮎也和名云蝙蝠扁蝠二音和名為其色似蚓而大者也

節忌七十三

十四日あうこよあれ乃みるて　ホよ
こ色うあるこそうんすこしも
のるれを心ア時うりのうよがうこうふ

節忌精進物

世風記曰正月十五日亥刻煮小豆粥為天粉祭庭中棄上則其粥凝時向東方再拜長跪服之終年無疫氣

十五日

十六日風のみやまぬ

白氏文集誰言郭国無霜雪盡在愁人鬢髮間

十七日

玉屑曰高麗使過海有詩曰水鳥浮還没山雲断復連西見嶋詩為榜人聯下句云棹穿波底月船厭水中天帰使喜若無久之自此復不言詩

酉陽雑俎曰月中有五色樹

このあきさよもすがらこもとうとうとう

このうたつ称せぬ人のこたりみん
よめる、

風よりも浪のいろうまさりすも
ゝ
ゝ
ゝ

なくて海のなかにいてくるやうなる
心ちする人々仲麿をいとをしがる人
をもうらやましがりて久しくなりぬれば
月をみるにつけてかの国なる心ぼそ
さのみにあらぬ心ぼそさにこの国にあ
りてこの国の人にあらぬ心ぼそさ
なりけりなどの月を海にうつしてなる
べきにもあらぬ月をかみるにつけ
てもあらぬ世をうらみ
ひとりもあるべきにあらぬ

仲麿
中務卿舟守子
元明天皇和銅
元年生ス
元正天皇霊亀
二年八月遣唐使
大伴山守同船シテ
入唐ス時二十六歳
栄雅古今集注
二仲丸唐ノ大暦
五年卒ス日本
光仁天皇宝
亀元年二アタル
時二七十九歳ナリ
続日本紀
光仁天皇宝亀

十年五月丙寅
前学生阿部仲丸
在唐而亡ス
栄雅説ト
古今羇旅

安倍仲麿

古今

あまのはらふりさけみれば
かすがなる
みかさの山にいでしつきかも

あまの山にいでしつきかも
ゆくさきもくもりなはてそ
あをによしなら
の山のやまのはにかくれぬとも
月をしるしるべにてみよ
あをによしなら
の山にてらしてはなれぬ
ものとしるべし
月をこそ
なれ
心をやすきてえらばんなにか
はるるよるのそらとこのくるとい
ふ
月の新たなるを
ことにこそ
なれ
人の心もかはるしるしにやあらん
さてい
ま
ろ
ろ
ろ

法華経序品
非此小縁

後撰

世一日の河とうよ永伊勢すの海人くしよ
あ秋いけこの海よ秋とこの秋
しもちもるやうよ
願よすのくしやあ
いそのうておうあ
とて波てるわ
かうい

あとそそふ乃方そんやうれわうて

和名鵜黒
色水鳥也
十六夜日記

なかくそそときしつ
とつ鳥いん乃うよあいのもとうていなの
ともよ浪ちうくちすかちりしやう
ちうもるのもよ
うう乃ことんとよ
そそきそそうんの海
なりかをいひ波ゆ
ん海とあうくかいくくむくぬやむと
いつなうこ秋すうよ海の又行そうれい
かしらもれしけぬすそちやそうん海よ

あり物なりけり

わくらはの宮をいとうとの[illegible]

いはれさりけり[illegible]

かちとをいく

廿二日[illegible]

ゆをくるふ心[illegible]

わくに年[illegible]

[illegible]

[illegible]

和名道神

幣 日本紀纂疏云幣謂束帛也謂布帛紙之類也

神代 ちはやの神 袖中抄云

天氣

帆手

可畏

幼童傳音明帝五六才ノ時父元帝日ト長安トイツカ遠キト問給フニ日ハ近長安ハ遠シトノタマフ元帝其故

老女也

子間給へバ挙「目」則見「目」長安
○不見「ト」答ヘ給フ

わらんとすみちのくるまに
又あるひとのうたに
あきかぜのすこしあらくなれば
なみたちいでしこゑをうたがふ
弾指
ねてもひるやまもつるるさとしてねぬ
廿八日あきかぜのすこしやまけれども
廿九日あきかぜのすこしてゆくくとくくと
こゑゆくすゑのあるくなりぬ
ものいふこゑのなりぬ
ものいふこゑのなりぬ
拾茨抄ニ
五の月の月の風
寅の月の月の風
睦月
真伐抄ニ
ものいふこゑのなりぬ
ものいふこゑのなりぬ
ものいふこゑのなりぬ
ものいふこゑのなりぬ
ものいふこゑのなりぬ
ものいふこゑのなりぬ
十節記曰正月
子日登「五土」
望四方得陽陽
静氣除煩惱
之術也

おほはらのあるあるある

ながむらくはしあのあきひとそ
あなあわれといふあきを先とする

年あらためてとしの乃ありぬ（イヤヒ）

さよ浪をもあわれとをくる

（イヤヒ）

廿日あの風あり　かいろくん　和ろあきとさき
なりとして　和中　ちりよあをいそして
阿波　深門
あをのみとなれわろ　和ろなれん西ふん
しもんをおとをんなからく　神佛
辛
いかりあこの（イヤヒ）みをわりぬとらしてとき
沼嶋
ちりぬしぬとして　和ふをたをたをん
田川和泉國

下学集曰二月餘寒甚而衣更着故衣更着キサラギトニ云

とをあれわろ（イヤヒ）いををていつを
とをとをわりいをりぬをん海よ浪よあを
ゐしれるし神仏乃先をかうあわを
ちちをん毋よあをしに日をかをあれを
みをうあををぬうをなりよりをいをを
いりをれをふをあれをかいをを物なをに
二月一日あををあのあるむを時をりは
やみをれをいををのをとをあをいあを
ふをゆをみのをんをのをよ風をを
ふをををををまををへてゆを和乃
黒崎
ねをををを松乃いをあれをいをれををん

四十五日

きさき人の御ぐしやうるはしくなりぬるとて
潛
ゑ
ゑ
ゑ
誣
ゑ
嘆嘆
二日おもかるやまひ
三日
風
久

なきあとの面影ばかりを思ひ出
くてあかされぬ
四日のあけぼの風さへ
あといとゞ物あはれなりねぶれも
忘れぬ夢の名残りを風
日しえはらぬ名をこそ乃ちとて
のこりまゝ
あと跡のこりなくむしれ
涙も名残なる人ぞ
なすの浪ちしもなしわるこゝろ
忘れぬ形見ぞ
とゝ
ありひとをして
やるもなき
わすれひむろしやうこを
ちる紙をもかさんとみたん
るんいるの女このあるとわかさなる
めしたまなるすもありうんをとゝいとむ
死イ
やれしくこゝはるをいつやらも
ありなを形見
てあるをんるあるる
てを忘てをむさしらぬいつをも
くむをるしよ日ろへよるる

五月ちかくなりていとはなれるさとをはなれ
ものをとゝまりてゆくすゑもしらぬくもゐ
なれるをしたれとよめるうた

世中をいとはしかりけるとしのうち心
はなれぬものとなりにしかはらの
なかれいたくこゝろはなれぬるかな
よしやよはやとなんかちとりあるこゝろをいとく
みあをはなをなりあさきをなれ
いてゝこゝろにはなれてくらやむるとてとゝまれ
ものをもとやうなるかちとりのうちとはなれ
はなれをしらとくよわをとれ

やうなるをいつかをとあしたをくんれあや
しくをこのをもいとはるゝをとをきをる
をれんけをみをもりあるをなりをるをふ
涙をこちをくくこゝろ弥をすいををこ
ありをあ風をををしたいまをもめしをして
河をををあり京のちをはくををひ所を
ををあをわをふのをあるをこ
いをりをかをみををあをもを
をををををんをんん
をいをあをゆくあをををいしをはををあの
松ををありをくてををまををををををみ

毛詩注曰諺草合歡食之令人忘憂

住吉四所
第一天照大神
第二中佐明神
第三表筒男命
中――
底――
第四神功皇后
日本紀云底筒男命
中――
表――
是即住吉大神矣

後　退　不意

うみをしかつてうみをあつれん
いとイ
そらおそれそらつゆをうみいかるみれた
もそのことなりぬまたあるひとあるうた

ちはやふる神のうれあるて海よ
のみをいれうみつうれ

いきてもこのはわれてそれむあまり
あをいつ神さんあるみすかしめとうく
うをよ神乃こうわとこそんつれうり
乃ん神のみんなるもの
六日みをはしのとかいてるはつき
てかんしをよいるうれひとくをんなみき

ふるひしむをあてをあてくをんふをさうをし
みれるうひのわいをまの春いをや
こちくなりぬとつふをうをひてるうを
ありかしらをまきくかくりいる

いはうをいつをりつるはる
あることをけてみあをうを
いをやひのかなるんのいれいひとくあや
しうをさをうをこをうやむあるをを
いをくをそくるうひしをまつりしみを
をんをすもあうをいをるる
七日をかしをみいりをうてこれのは

ゐる河のゐひをめたなゐこわるふ永代のほる
ことをうたしかるあひさよるきみの
病たんもとうちくしきんそかやう
のとをうをうをうをりうをかをもとわいう
うをめれうをめてくゐたほうをやわ
らんからくしてあやしきうを弘行りゐる
やりうりのうを

きとうをてん河のわりゐの水をあさこ
ふもりうをあしたなりむをふうか
ん紙いやうひををれをりなりをしひを
うをうをのあり称ういま弘をり

うをとふふ
みりのんのあるれなるをうり
ん乃うをいゐやらくなりのるうをりひり
をんをしていつるなるをしあうらぬうをよ
やうれをねをいをうをしものをやや
しうりうりをよりうをなりてねをりを
八日を我河乃はりをるのうをりひみを
をとりはりをよりをるをうをりをれい
乃やをひかりをくいをくなやむありひを
あをりうりなりをものりををきをりを称し毒
をををやうをりをりをいひは

齋日
八日 十四日
十五日 二十三日
二十九日 晦日
小月 十八日 十九日也

惟高親王
文德第一皇子母
紀静子 名虎
女也

してをつてゐるとゝやうにもてなしあつ
かうちみそれていとをふ用
九日ゆとゝるさよおきあつ舟をむさしの
の国もとも河のあるあれとかさりよりとも
かさりこのあひるとよわさのゝ海をれあがれの
和とつゝをゝるあるもよねいをゝとゝはをゝく
をひつゝをて無きのほるよるさされ流と
つゝあるはみ流くゆくりの院むゝとをひ
ゆりあこれいをしゝるゝるあせゝりへ
なるゝとゝるゝ松のれゝしあるゝるのはい
むめのゝれさゝりゝるゝひとゝくれいゝくれ

渚

業平
元慶元年正月
十五日任蔵近衛將
親王

古今
巻の中

惟高親王

業平

ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

とひはなくそこはやこれもちろんひて
ひかくのひる人くれるよ京うるる
ものしはよれ人なるもるさいるしし
くもてうるるぬかはもりあ人百人これ
あるとあるとろよ多いそさてあり
もおれをんあむしかこれたるるきよ
をしてて

なるもるはうん百人のあ
ありしもるくてらうるすさ
とい元あそなるちくも亀をきてあ
いそあんからやうのもいもこのむそ

清和天皇御宇
豊前宇佐ヨリ
此所ニウツリ給御
詣宣ニ我是人
皇子才十六代
誉田八幡大也ト
侍リ故ニ八幡宮
ト申トソ
相應寺
三代實録十三曰
山城國乙訓郡
相應寺者元是
漁商北屋之地
也往年權僧正
壹演法木觀行
橋本頭遭天著

あるもあるとうしろもこてもうる
ろるそんぬはわるとろひとと
とるるこあ

宇土野

十日さるるこあるあのはるて
十一日あいはるふあるあやをぬくてさし
あはるる東のるるよ心のよるはれるをそ人
よるんやるるれるとるをてよるる
るれるるるはるるるはるるみは
るるるるあるあるるて上相應寺は
あるるるはるるるはるるるるる
柳

八幡

熱上山序風涼有一老嫗辟穀獻地壹演便在其中聊作壇塗鐘平地中得泊佛像因縁相應霊瑞頻現大政大臣歎其希有奏建道場云

泊瀞 和名廣韻云浅水貌也

十一日 心さしのあるあ

十二日 ふるあめ

十三日 ふるあめ

十四日 あのつらつらの内京へとまるやあ

十五日 ふるあめ

十六日 ふるあめ

十七日 ふるあめ

十八日 ふるあめ

十九日 ふるあめ

十日 ふるあめ

十一日 ふるあめ

十二日 ふるあめ

十三日 ふるあめ

十四日 ふるあめ

河月のあるころわるくてのいとく
この河あすの河ゐねとかもせけるは
かくるまりるとこのいとあるあること
武さるの月あるひるるるは
ることなるかあもかるさりるを
又あるいとく
はかりをのるるるるるかはる河
るてをひてもわるるるれ
又はるかるるを
かはる河わるるるもかるねと
かるるるるるなるるるなり

長明無名抄曰
武人のいとく要
之ゝ年比住る
京の辺に勘解由
小路とかわる所に
のちのおくるる

都イ

京のるれしるあるもるるもあまりるね
るあるあるくもるるるを京ありいを
さるるるるるわるる家るいあるてかるふいるる
月あるるれをいるるるるるねるきし
しるもかるているひるくるるるるを
るるれるるるる又よあるるるりるるるる
あれるるるるるるるるるるるるるるひる
又のやるるれるんのるるるあるるれるせ
るるれるるるるるるるるるるるるるるも
るるるるるるるるるるるるるるるるるも
いるるるるるるるるるるるるるるるるい

世むとて いとゆめゆめ みづから
ところあるべきはらうとは おもはせもあるべきいたづら
むとのみらるよ まことやもとうりまん
うえもなくうるいまはひるるそ
まことにかはるもののうれあるもそれて
あるれもそ人くいるみなひいてあるとか
くれはひしきうらうりこれらんそ
くもしそんなこれまちもよかつね
くいうはうるさあるかもそれるうか
ひくめしるかれうりるかるす
きこまそしてむやうよむしもうんと

ろうろうた
むすもしもうあ物はわるやふ
こまりのあるとるうかるすき
ゆるあるすやあんみくなん
乃人のわのちもよみまえ
とかくうるもせまやや
わもれるもらわるきこはれもえ
いくるすとまれうくまれくありてん

蟻通乃神よそ 和歌序

同

きこの國のうるうかはるもみち

そにいうよしまのこゑくらしわ
ゆゑ人くさちまさて
いつもいとうかれなる
なんとやしなくさとなね
とこそあの神なるけさくのれよそ
いかりなるしゆゑをとうみてくも
なれいかるよさもさてあるひあ
のをおりあもれやそもくなふとと
うきこえんとうあるとしれのみと
いつはきてたこさてあるこ
からやとかり、

ものこゑくらしわ
ゆゑとい世しやい

大井川行幸和歌序

同

おくれわの花乃はせ代をの月ハこゑのうこ和い
ゑ乃ゑ乃ゑ乃の蔦おこしうまうんまをれ
ゆくを秋ハ和ゑをうこをうんて月乃うこれ
ゑれゑ乃ゑ乃梅はをうゆゑをひてをこ
しうこをしてゆ月和小倉山乃はを
川水乃大井の川をよ行幸しゑをれい
ゑをうこ八幸れひをれをしれくみ

ゆきとまちかなれあるこゝろにいるられ
ふる雪ゆゑにそはんいつるくるとみるを
乃ぞとしてはなをたまはるとゝ秋の水をひて
いるゆく木葉とあやまられ紫乃山ゆられた
ちの人なる義、錦とおもふをみちの紅乃
あらしにちるゆゑくるゝを面ときらん菊より
も乃花よりのこれるをとおもふ是とおもふ
を第の鶴川をてゝ立ゆ乃ゆわとゝ
ゝ亀ゆの後心れ波よるゝゆ人の波をゆ
し藤乃花を花よ面をひて玉れとみえわ
ゆふかも光あるよゝをゝて人よなを色をゝ入江

乃松いく世ゆ雪ゆんといつゝゝ波をゝゆをゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝゝんれゝゝゝゝゝゝ面
ゝひゝゝゝゝゝゝゝの紅映乃ゝをゝれ
ゝゝゝれゝゝ乃義ゝゝゝゝれゝゝゝゝ
ゆゝ岩屋ゝゝゝゝゝゝこゝゝゝんを立人
ゝゝゝゝ山ゝゝの紅世乃ゝを忘ゝ面乃ゝ波
むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

扶葉拾葉集巻第二終

土佐日記

本奥書

文暦二年乙未五月十三日乙巳老病中雖眼暗不慮之外見紀氏自筆本
蓮花院宝寿本料紙白紙不堪高一尺三寸三分計廣一尺七寸二分計紙也
表紙續白紙一枚端折返不有外題土佐日記貫之其書様和歌非
列行定行書之聊有闕字哥下無闕字而書後詞不堪感興自書写之
昨今二ヶ日終功　　藤門明静

紀氏

延長八年任土佐守　在國載五年六年之間兼平四甲午五乙未暦三百一年
紙不朽損其字又鮮明也　　在朱下
不讀得所々多只任本書也
如のかりそめ　孫安　　侍ら[illegible]